

XX—6. 瑞浪コハクに含まれるトビムシ目の化石について

(Insecta : Collembola)

吉井良三*

岐阜県瑞浪市釜戸町において発見されたコハクの内、トビムシを埋包するもの10点を検出することができ、16個体のトビムシを確認することができた。同定の結果は以下に述べる通りである。

1. *Pseudachorutes* sp. ヤマトビムシの一種 1 ex.

分類上の所属：Arthropleona フシトビムシ亜目—Poduromorpha ミズトビムシ上科—Pseudachorutidae ヤマトビムシ科。

標本番号：No. 110—c

触角が短かく、色が淡灰色であり、叉状器がのびていない。*Pseudachorutidae* (ヤマトビムシ科)であることは確実で、体形から考えて *Pseudachorutes* 属のものと思われる。この属は森林の落葉層に見出されるもので、やや稀である。

2. *Lobella* sp. イボトビムシの一種 2 exs.

分類上の所属：Arthropleona フシトビムシ亜目—Poduromorpha ミズトビムシ上科—Neanuridae イボトビムシ科。

標本番号：No. 144—c

保存が悪く、判定し難い2個体が入っている。体が平たいのと、体の毛が長いので、あるいはアカイボトビムシ属であるかもしれない。これも森林の落葉のなかには普通に産する属である。

3. *Lophognathella choreutes* BOERNER クロトビムシモドキ 1 ex.

分類上の所属：Arthropleona フシトビムシ亜目—Poduromorpha ミズトビムシ上科—Onychiuridae シロトビムシ科。

標本番号：No. 144—b

保存状態も所在位置も悪いので、正確な同定ではない。ただ、体の外形がこの種に大変似ているので、本種と同定した。この種は1属1種で、日本と北米(太平洋側)から知られ、シロトビムシ科のなかの、特異な種である。日本では、林野・耕地などに極く普通に見られる。

4. *Isotoma (Desoria)* sp. ツチトビムシの一種 3 exs.

分類上の所属：Arthropleona フシトビムシ亜目—Entomobryomorpha アヤトビムシ上科—Isotomidae ツチトビムシ科。

標本番号：No. 1, No. 110—b, No. 144—a

小形の種で、体色は黒い。全般の形状、肢および叉状器の形からみて、この種はツチトビムシ科のもので、体長の小さいことから、*Isotoma* 属のなかの *Desoria* 亜属の1種と考えられる。正確な同定は不可能であるが、現生の日本のトビムシと比較すると、日本各地の山林に普通にみられる *Isotoma (Desoria) trispinata* MACGILLIVRAY, 1896 に近似であり、あるいはこの種であるかもしれない。

* 京都大学教養部生物学教室

5. *Isotoma* sp. ツチトビムシの一種 1 ex.

分類上の所属：3と同じ。

標本番号：No. 104-f

標本の所在位置がわるいので、正確に同定できない。

6. *Homidia* sp. アヤトビムシの一種 2 exs.

分類上の所属：Arthropleona フシトビムシ亜目—Entomobryomorpha アヤトビムシ上科—Entomobryidae アヤトビムシ科。

標本番号：No. 60, No. 133B-n

中型の種で、体色が淡い。体表には長毛がみられ、第4腹節が他の体節にくらべて異常に長い。このような特徴からみて、本種はアヤトビムシ科のものであり、そのうちの *Homidia* 属、あるいは *Entomobrya* 属のものと思われる。この2属のうちのいずれに属するかは、叉状器の莖節上の棘列の有無によって判定されるので、現状のままでは決定しかねる。種名もまた未定である。しかし、コハクの中の標本が、かりに生時の体色を保存していると仮定し、これを現生のものと比較すると、*Homidia sauteri* BOERNER, 1907, f. *depicta* BOERNER, 1907 に近い。この種もまた、日本各地の山林・原野などに普通に産するものである。

7. *Entomobrya* sp. アヤトビムシの一種 1 ex.

分類上の所属：5と同じ。

標本番号：No. 104-b

コハク内の標本の腹部にあたる場所に気泡があり、そのために判定がむつかしいが、触角第Ⅳ節の形などから、*Entomobrya* 属のものと思われる。体色がよく保たれており、紫色のバンドがあるので、あるいはザウテルアヤトビムシ *Homidia sauteri* BOERNER に近いものかもしれない。それならば、山林・原野に普通に産する。

8. *Lepidocyrtus* sp. アヤトビムシの一種 3 exs.

分類上の所属：5と同じ。

標本番号：No. 133A-a, No. 133A-b, No. 134D-e

よく保存された標本である。体色は白色に近く、scale があり、また、中胸が前方にせり出していること、antenna がみじかいこと、などの特徴によって、Entomobryidae (アヤトビムシ科) のうちの *Lepidocyrtus* 属と考えられる。やはり山林の落葉層に普通の属である。この属は種の同定がむつかしくて、日本では現生のもので、まだ確かな分類がなされていない。

9. *Tomocerus* sp. トゲトビムシの一種 1 ex.

分類上の所属：Arthropleona フシトビムシ亜目—Entomobryomorpha アヤトビムシ上科—Tomoceridae トゲトビムシ科。

標本番号：No. 117

触角が欠けているので、正確ではないが、叉状器の形態からみて Tomoceridae (トゲトビムシ科) の一種と考えられる。体があまり大きくないので、*Tomocerus* 属と考えてよい。日本の林野には、ごく普通に産する属である。

10. *Sminthurus* sp. マルトビムシの一種 1 ex.

分類上の所属：Symphypleona マルトビムシ亜目—Sminthuridae マルトビムシ科。

標本番号：No. 140

標本の入っている位置がわるいので、判定がむつかしいが、頭部がたいへん大きくて、腹部の後端の節がくびれており、叉状器の形が延長していないので、Smithuridae (マルトビムシ

科) のものと判定される。ただし、体は半球形になってなくて、延長した形をしているが、これは標本が変形したためかと思われる。体の大きさからみて、*Sminthurus* 属に近い。

ま と め

以上の結果を総合してみると、このコハクの中に産するトビムシは、その属がいずれも現在、日本の山林に見出されるものであり、あまり特異性がなく、おそらく現生の種と同一であろうと思われるふしがある。したがって、その化石を産した時の状況も、現在の日本の山林とあまり大きな変化がないと考えたい。ただ、トビムシは同一種が広い地域にわたって分布し、あまり気候やその他の地理的条件に影響されないので、このような推論をする材料としては、あまり適当ではない。